



10a 当たり収量 5 t 以上を目指しましょう

定植後の生育状況

定植後は、ほとんど降雨がありませんでした（図1）が、十分にかん水できたところが多く、晴天日が続いたことから、中～やや旺盛な生育となりました。しかし、乾燥した気候で推移したため、展葉速度がやや遅くなっています。

2番花房の花芽分化の状況

9月下旬～10月半ばの気温が高く推移した（図1）ため、2番花房の花芽分化は株冷Ⅳ型で、平年より遅くなりました（10月20日現在ではほとんどが未分化）。なお、本作型における1番果房と2番果房の果房間葉数は6～7枚になると推察されます。

病害虫の発生状況

炭疽病は、定植直後には少なかったが、徐々に増加し、平年並みの発生となりました。特に、専用親株への第1回目の防除（2月下旬）が不十分なところでの発生が多くなっています。ハダニ類は、定植直後は少なかったが、乾燥状態が続いており、増加傾向にあります。ハスモンヨトウ、オオタバコガは徐々に増加傾向にあり、今後も注意が必要です。

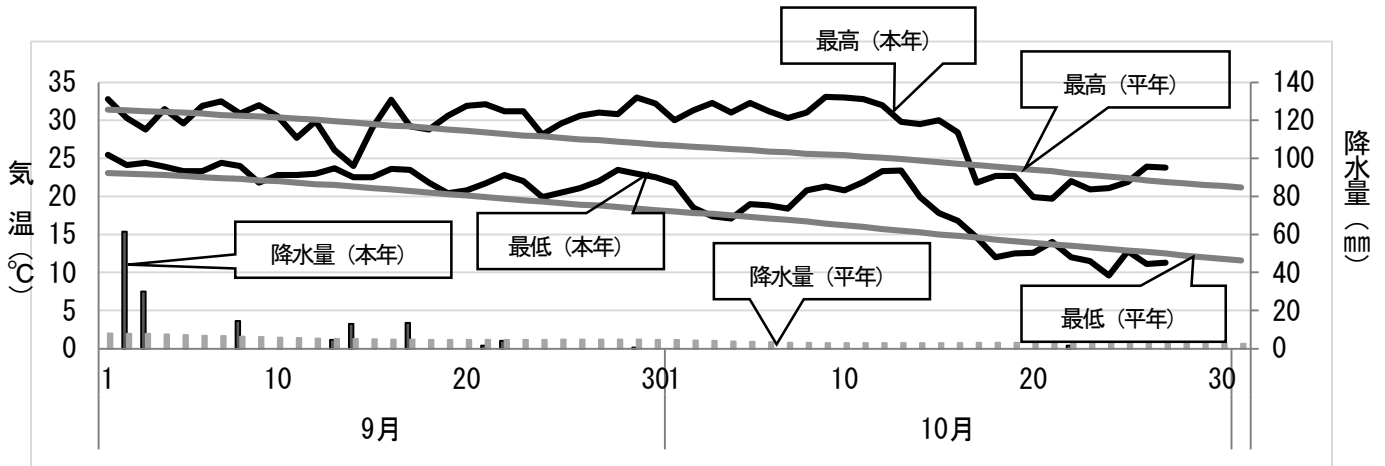


図1 気温及び降水量の推移（アメダス 久留米より）

【今後の気象予報】

〔九州北部地方の1か月予報〕（予報期間：10月23日～11月22日 10月21日 福岡管区气象台発表）

- ・暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。
- ・向こう1か月の降水量と日照時間はほぼ平年並の見込みです。

平均気温 低い 20	平均気温 平年並 40	平均気温 高い 40
降水量 少ない 30	降水量 平年並 40	降水量 多い 30
日照時間 少ない 30	日照時間 平年並 40	日照時間 多い 30

図2 九州北部地方における向こう1か月間の天候の見通し

週別の天候・平均気温

	10/23~29	10/30~11/5	11/6~19
天候	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
平均気温	ほぼ平年並み 見込み	高い 見込み	ほぼ平年並み 見込み

【生育の見込み】11月の気温はほぼ平年並みかやや高いと予想されています。現在、生育がやや遅れているので出荷開始は遅くなると思われます。また、2番花房の分化が遅く、1番果房と2番果房の果房間葉数が多いので、1番果房と2番果房の出荷の谷が大きくなると予想されます。

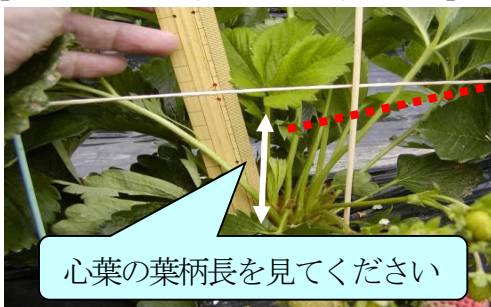
11月の管理目標

- ・適切な電照管理や保温管理、ジベレリンの活用等により、12月下旬の草高が25~30cmになるように管理する。
- ・ビニル被覆後の高温に注意するとともに、生育ステージに合わせた温度管理を行い、果実品質の向上を図る。
- ・うどんこ病、灰色かび病、菌核病、ハダニ類及びハスモンヨトウ等の防除を定期的に行い、発生を抑える。

1 電照管理

- 電照は、11月10~15日から、1~2時間で開始し、その後は、心葉展開時の葉柄長を目安に時間を調節する(表1)。ただし、頂果がすでに着色期になっている場合や生育が遅れているほ場(特に普通作型)では、早めに開始する。

【写真1 心葉展開時の葉柄長】



【表1 葉柄長に基づく電照時間の調節】

草勢	弱い	適切	強い
葉柄長	9cm以下	9~12cm	12cm以上
電照時間	時間を長く	現状維持	時間を短く

○電照効果は5~7日後に現れるので、生育が旺盛になりすぎないように、1週間後の着果負担や天候などを予測して電照時間を調整する。

※11月中旬~下旬は、3番花房の花芽分化期と考えられる。電照開始が早すぎると3番花房の分化が遅れるので注意する。

2 温度管理

- 外気の夜温が10℃を下回るようになったら(通常11月上中旬)、ハウスを閉め込む。ただし、ハウスを閉めこんだ後に夜温が10℃を上回る場合は、夜間ハウスを開放する。
- 頂果の状況に応じて温度管理を変える(表2)。株が小さく生育が遅れている場合は、高めに温度管理して生育を促進する。収穫中は低めの温度管理とし、果実肥大を促し品質向上を図る。

【表2 1番果房の頂果の状況別温度管理の目安】

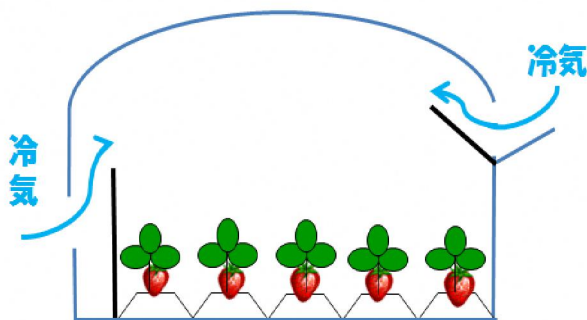
頂果の状況	昼間	夜間
～着果期	26～28℃	10℃
着果期～白熟期	24～26℃	7～10℃
白熟期～収穫期	20～24℃	5～7℃

- 加温機の準備
 - ・加温機は早めに準備し、使用前には点検・清掃を行い、急な冷え込みに備えておく。
- ハウスの保温性向上

3か月予報（10月25日発表）では、12月及び1月の気温は平年並み～平年より低いと予想されている。被覆ビニルの破れや隙間がないか点検し、破損箇所や隙間を補修する。
- 冷気の進入防止

株に直接冷気が当たらないよう、谷やサイドに冷気よけのビニルを張りワンクッション換気を行う（図3、写真2、写真3）。

【図3 ワンクッション換気の例】



3 ジベレリンの活用

- 電照と併せてジベレリンの活用により草勢維持を図る。

4 摘果

- 摘果は、2番果房が出蕾した後、生育状況に応じて行う（表3）。
- 1～2番の果房間葉数が2枚以下の「早進株」を認めた場合は、草勢維持のために強めの摘果を

行い、2番果房と合わせて1株当たり10～12果に着果数を制限する。
(着果数が多い場合は、小果が不受精になりやすく株も弱りやすい。)

【表3 1番果房の摘果後の着果数の目安】

1～2番果房間葉数	4～5枚	6～8枚	9枚以上
1番果房の着果数	7～9果	10～12果	枝花のみ摘果

5 かん水・液肥

- かん水や液肥は、草勢が低下しないよう定期的に行う。
- かん水の目安として、pF値1.7～1.8で管理する。ハウス内の極端な乾燥は、生育遅れとハダニ類多発の原因となる。
- 収穫期間中のかん水は、収穫後に行う。
- 液肥は、窒素成分で月に1.5～2kg/10aを、3～4回に分けて行う。
- 液肥の施用は、早期作型では着色始め、普通期作型では11月下旬以降)に開始する。ただし、生育が悪い場合は早めに施用を始める。

6 玉出し・わき芽除去

- 頂果の着色が開始する頃に、軽く玉出しや葉よけを行う。
- 葉が裏返るほどの葉よけを行うと、光合成の効率低下や株にストレスがかかるため、果実に葉が被らない程度に軽く行う。
- 「あまおう」は果梗が折れやすいため、作業の際は果梗が折れないよう注意する。
- 玉出し作業と同時に、わき芽やランナーを除去する。

7 発根促進

- 開花後は、着果負担により根量が減少するため、発根促進剤を活用し、できるだけ多く発根を促す。

8 炭酸ガス施用

- 日中の炭酸ガス濃度が400ppmを下回らないように施用する。
- 施用例
 - ・ 施用始め 11月20日頃
 - ・ 施用時間 午前9時～午後3時
 - ・ 施用方法 2時間間隔で15分ずつ燃焼

9 病虫害防除

【うどんこ病】

- ビニル被覆後は発生しやすくなるので、定期的に農薬の予防散布を行う。
- 軟弱徒長にならないよう、極端な多肥や蒸し込み管理を避け、換気を良くする。
- 発病を確認したら発病葉・発病果は速やかに除去し、ハウス外に持ち出す。
- 多発ほ場ではやや低めの温度管理とする。
- 薬剤の粒子が細くなるほど防除効果が高くなるので、動噴の噴口は定期的に交換する。

【 灰色かび病 ・ 菌核病】

- 11 月下旬頃から温度が低くなると発病しやすくなる。ハウスサイドや谷の下など湿気が多いところに発生しやすい。
- 一度発病すると防除が困難であるため、定期的に農薬の予防散布を行う。
- 発病果実や発病葉は、見つけ次第除去し、ハウス外に持ち出す。
- ハウスの換気を十分に行うとともに暖房機や循環扇を利用し茎葉の結露を防ぐ。

【 ハダニ類 】

- ビニル被覆後や1 番果房収穫後の防除を徹底する。
- ハダニ類は、葉裏に生息するので葉裏にしっかりと薬剤がかかるように、丁寧に散布する。
- 天敵（カブリダニ類）を利用する場合は、放飼前に天敵に影響が小さい殺ダニ剤を散布してできるだけハダニ類を減らし（ゼロ放飼）、適期（11 月上旬まで）に放飼する。

【 ハスモンヨトウ 】

- 10 月の気温が高く、降雨が少なかったことからハスモンヨトウの発生が続いているので、防除を徹底する。
- 年内は、定期的に防除を行うようにする。

【 アザミウマ類 】

- 飛び込んできたアザミウマ類を年内に防除し、ハウス内で越冬させないことが重要である。
- ハウス周辺の雑草に寄生し、ハウス内に飛び込むのでハウス周辺を除草する。

【 アブラムシ類 】

- ハウス周辺の雑草に寄生し、ハウス内に飛び込むのでハウス周辺を除草する。

10 親株管理

- ハダニ類や炭疽病の防除を行う。
- ポットやプランターに追肥をする。
- 親株床を除草した後、できるだけ早くマルチフィルムで被覆する。

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～
”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！

県では、様々な収入減少リスクに対する備えとして、
収入保険 への加入を勧めています。

トピックス 秋期ランナーを利用した無病親株の育成

本年度は、育苗床で炭疽病の発病が7月中旬から拡大し、一部では多発したところもありました。また、本田で定植後に炭疽病が多発しているところもあります。炭疽病が多発する要因として専用親株での感染拡大が考えられます。このため、本病による被害を安定的に抑えるには、薬剤の計画散布等の対策とともに、感染していない無病親株を用いることが極めて重要です。

本年度、育苗期や本田で炭疽病が多発したところでは、次年度の発生を抑えるために必ず無病親株に更新してください。無病親株を確保する方法の一つとして秋期ランナーの利用を紹介します。

◆秋期ランナーは炭疽病に感染しにくい

イチゴ炭疽病に感染した株を本田に定植しても、ハウスビニル被覆後から年末までに発生した秋期ランナーは、極めて感染しにくいので、これから採苗すれば、無病の親株を育成できます。

ただし、秋期ランナーから採苗した親株であっても炭疽病の薬剤防除は定期的に行ってください。なお、秋期ランナーは株冷苗からよく発生するので、株冷苗からランナーを採ってください。

◆秋期ランナーの採苗方法（例）

- ① ビニル被覆前に発生したランナーは全て除去し、被覆後に発生したランナーのみを使用する。
- ② 子苗に根こぶができていないランナー（葉数2.5枚以上）を切り取る。
- ③ 切り取ったランナーの基部を束ねて水を入れた容器に浸す（萎れ防止）。（写真4）
- ④ 鉢受けの要領で子苗をポットの培土に固定する。
- ⑤ ポットへのかん水、容器への水補給に留意する。
- ⑥ ポットに根がまわったら、速やかに親株床やプランターに定植する。



写真4 秋期ランナーからの採苗法

◆秋期ランナー利用上の注意点

- 秋期ランナーの採苗時期が遅くなると、親株からのランナー発生数が少なくなるので、できるだけ早く採苗する。ビニル被覆直後に発生した秋期ランナーから採苗するとよい。
- 秋期ランナーを利用した親株は通常の親株に比べてランナーの発生数が少ないので、通常の親株より多くの秋期ランナーを準備する。

（平成23年度 福岡農総試の試験では、秋期ランナーの子苗を11月22日に鉢受けした後、1月18日にプランターに定植し、露地で育苗した場合で5月中旬のランナー数は約4本/株）

本資料中の農薬についての記載は令和3年10月19日現在の登録内容に基づいています。